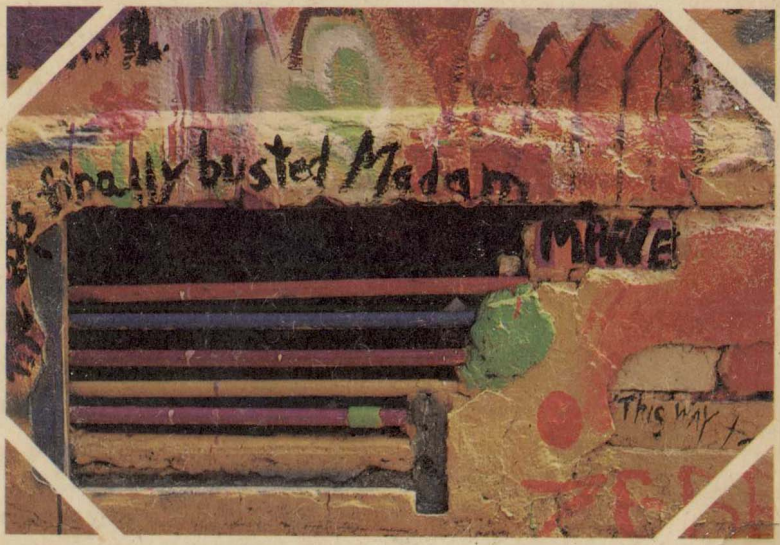
植草甚一

スクラップ・ブック

32

小説は電車で読もう



晶文社

植草甚一スクラップ・ブック 32
小説は電車で読もう

一九七九年一二月二〇日発行

著者植草甚一
発行者中村勝哉
発行所株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)
振替東京六-六二七九九
中央精版印刷・美行製本
ブックデザイン平野甲賀
©1979, Jin'ichi Uekusa
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

小説は電車で読もう

晶文社

表紙写真■植草甚一

本文イラストレーション■柳生弦一郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

小説は電車で読もう＝目次

1 中間小説の面白さはスピードから生まれてくる 11
2 中間小説誌を破いて一編ずつホチキスでとめる癖がついた 19
3 池波式サスペンスと山田式ユーモア 26
4 覚えたばかりの「ゴブルティグック」という単語が口から出てきた 34
5 病院に五十日間カンヅメとなり三百時間ほど本を読んだ 41
6 ゲテモノ料理だが、筒井康隆の「夜も昼も」には舌鼓を打った 48
7 競馬を知らないぼくでも一気に読んでしまった 57
8 こんなのが本当の女流ハードボイルド作家なんだな 65
9 感心しっぱなしは、好きになったのとおんなじことかもしれない 74
10 ヒッチコックは最初にこのクライマックスを頭に浮かべたそうだ 82
11 まったく知らなかった作家でも友だちみたいになってくる 91
12 その夢は終りまで続くパーフェクト・ドリームだった 99
13 ぼくだって二人のものなら十行くらい読んで当てることができた 108
14 こいつには東京のコーヒー店が十軒してぶつかってもかなうもんか 116
15 アメリカと日本の人気作家が似たような発想の変身物語を書いた 125
16 ぼくは田中小実昌の北海道さいはて旅行記を何編読んだかな 133

17 京都の古本屋にピンク色表紙のエロ本が百冊ばかり並んでいた 141
18 「探偵」をめくったとき、こいつはいいなと思ったのが扉の献辞だ 149
19 こんなふうに気を持たせる短編集の題名がイギリス人はすきだなあ 157
20 すこしブラついたあとで最初のコーヒーハウスにはいって読むんだ 166
21 やっと窮地を脱したのは原稿締め切り十時間まえだった 174
22 またいつもと同じ顔ぶれになるなあ、どうしたらいいんだろう 183
23 そのときからぼくは地震には恐怖をいだかなくなった 191
24 「それを繰り返し話しながら」という本の題名を借用したくなった 200
25 題材の即興性を、その証拠写真で判明させてくれた作品があった 207
26 筋書きのソフィスティケーションとでも言いたい変てこな試み 216
27 クレマン映画は言いたいことについて間接的な役割を果してくれた 224

解説：中間小説への挽歌　筒井康隆 223

初出一覧 233

小説は電車で読もう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

I　中間小説の面白さはスピードから生まれてくる

中間小説の面白さは、それを読んでいくスピードから生まれてくるのだ。あんまりゆっくり読んでいると、すぐにつまらなくなるものだし、それでも面白かったら、それは傑作のなかにはいってくる。かりに「小説現代」をいつも最初に買っている中間小説誌ファンが、そのときなにかの用事で東京駅から新幹線に乗ったとしよう。

まずパラパラとやってから百枚ぐらいのを、さらりと読んでしまい、そこでタバコをだして一服する。そうして新大阪につくころには、だいたい一冊をたいらげてしまうといったスピードなのだ。ぼくもそうなりたいな、と思ったのが七月のはじめで、さっそく練習にとりかかってから二カ月たった。

というのも池波正太郎や山田風太郎や佐藤愛子や森村誠一をはじめ、読まずぎらいな作家がとても多かったからで、それでは毎月いろんなのにぶつかって判断する資格がまるでないからである。それで古本屋で集めた一月から八月号までの中間小説誌数種類を破いて、二百編ばかりホチキスでとめたが、どんな作家なのか知るには単行本のほうがいいし読みやすい。これもたくさんあったが、五十冊

ちかく最近のを読んでいくうちに、最初は一冊につき三時間以上かかったが一時間半あればすむようになった。

なぜそう簡単にかたづくかというと、それはあたりまえなことであって、単行本には平均して七編はいった短編集が多いが、どれにも共通しているのは、最初の二編は面白いのに、あとのはみんなつまらないから、はやく読みおわってしまうのだ。こんなことは外国作家の場合にはないといっていい。これもあたりまえなことで、だいたい彼らは長編に力こぶをいれるかたわら、まあ三年に一冊といったふうに短編集を出すのが普通だし、作品のあいだに時間的へだたりがあるので、読んでいるときの味が、どこか一編ずつちがってくる。

このへんが、日本ではさかさまで、人気作家になると一年に短編集の、二、三冊は平っちゃらときている。それはいいんだが、たいてい作家が、ふたいろの味しか出せないし、それも片っぽうの味しかよくない。新人だと、どれも味がおんなじになってくる。江戸時代の深川遊廓の話がすきな岩井護の短編集「雪の日のおりん」(講談社)がそうで、おりん、おひさ、おきくに惚れこんでしまう登楼客が、小鳥屋とか行商人とか時計師とかになっていて、商売がちがうところが興味をさそうが、三人の深川女郎のほうは一つの型にはまっている。そのせいだろう。惚れあったあとでどんなことになっても、みんなおんなじ印象をあたえるのだった。

二百編集めた雑誌切り抜きのほうは半分しか読む時間がなかったが、そのあいだに読まずぎらいはいけないなと思ったことがいくどもある。百編のうち人気作家の器用な腕前におどろいたのが三十編もあったからで、おかげで十月号の中間小説誌の新聞広告を見たとき各誌の作家ラインアップがハハ

アとよくわかってくる。どうやら褒めたり文句をつけたりする資格がついたのかもしれない。

その中間小説誌は、八月七日に一冊、十二日に一冊、二十一日に四冊一緒、二十六日に一冊というふうに書店に出た。七冊を合計すると連載をのぞいて八十五編の中編・短編があったが、それらを新幹線式速読で味わっていったところ、延べ五日間かかり、これならまあ読ませると思ったのが、二十四編あったが、それはそのときだけのことで、あとで印象から消えてしまった。

中間小説は、それでいいのかもしれないなと考えながら、メモ用の雑誌掲載一覧表を見なおしたところ二重マルをつけたのが四編ある。二重マルにしたのは、外国のすぐれた短編などを読んだときとおなじように、何かこう強いものを感じさせたからである。ハードボイルドで暗いものだが黒岩重吾「浜谷の蘚苔植物」（小説現代）と菊村到「ダニは殺すべきか」（オール読物）と野坂昭如「地底夢譚」（小説新潮）と、ソフトボイルドだがこれだけはゆっくりと読んだ水上勉「緋の雪」（小説新潮）で、どれもはっきりと思い出すことができた。

それから二重マルをつけてしまおうかと迷ってしまい、とっておきにしたのが助川明という聞いたことのない作家の「大爆発」（問題小説）である。政治家や大金持ちが行きつけの銀座にある一流バーがゲバ学生に占拠されるドタバタ諷刺で、ちょいアラバールの芝居みたいだった。余談だが古本屋の主人の話によると古本の中間小説誌では「小説現代」がいちばん売れ、そのつぎが「問題小説」だが、両方の客層は、まるでちがっているそうだ。そういわれたときはビックリしたが、「大爆発」という珍種はポルノづいた読者にとって高級なシロモノだし、ほかの雑誌でも、ちゃんと通用するだろう。

とぼけたアイディアと個性がある文章から珍種は生まれてくる。田中小実昌の書き下ろし「自動巻

時計の一日」（河出書房・八月）や小林信彦のギャグとドタバタの長編「大統領の密使」（早川書房・七月）や殿山泰司の前衛ジャズ的リズムを文体に出した短編集「バカな役者め!!」（講談社・六月）は、そういった珍種だが、単行本には、ほかにも取りあげておきたいのがある。

中間小説誌の目次をひらくと、そのとき登場する作家の顔がズラリとならんでいるのがある。いったいあれには魅力があるんだろうか。個性的なものを引っぱりだしてみせる優秀なカメラマンがいくらもいるんだから、いつもおんなじ表情をしている使いふるした写真なんか、さっさと破いてしまったほうがいいだろう。中間小説にかぎらず作家と読者とをむすびつけるための顔写真は、それを見たとたんに読みたくなるような牽引力がないと、かえって逆効果を生んでしまうものだ。

このことをアメリカの出版社では、ちゃんと心得ていて、新刊書のカバー裏に複写した新人や中堅どころの顔写真がそうだが、読む気がしなくなるようなのは出しっこない。これは大事なことだ。なかなかいい顔つきをしているなあ、これならいいものが書けそうだな、という気がしてそれを読みはじめると、やっぱりおもしろいのが多いし、途中で二度も三度もその顔を見なおすということになる。一例をあげるとブラック・ユーモアがよく効いた「スターン氏のはかない抵抗」（白水社・七月）のブルース・ジェイ・フリードマンがそうだ。

ところが中間小説誌に勢ぞろいした人気作家の顔をながめていると、こんどもまたおんなじようなものを書いてしまった、悪く思わないでくれ、読まなくたっていいんだよ、といって照れかくしに笑っているように見えてくる。それでもぼくは今月分として八十五編を読んだ。そうして、おんなじだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.